

唱衣という儀礼の次第については、四清規のうち『禪林備用清規』が『勅規』と類似する詳細な次第を載せるものの、他の清規では唱衣実施の際の念誦・回向が記述の中心となつてゐる。これら念誦・回向は『禪苑清規』から『勅規』に至るまで大きな変化は認められない。したがつて四清規から読み取れる教義的意義—無常を表す・惜しむ心を打ち破る・死者の往生を祈る—についても、『禪苑清規』以来唱衣に求められた意義が踏襲されているといえる。但し『叢林校定清規總要』と『禪林備用清規』では、「無常を表す」・「惜しむ心を打ち破る」という意義について、唱衣念誦・回向以外に「烏波難陀比丘の故事」によつても示していることが確認できた。

実際に唱衣での競売に掛けられる遺品がどのようなものであつたか、『禪苑清規』や『勅規』からは判然としないが、『勅規』には、僧侶が辨道具（三衣・坐具・偏衫・裙・直綴・鉢・錫杖・主杖・拂子・数珠・淨瓶・濾水囊・戒刀）を所有しただらう事、物品に限らず不動産にまで及ぶ財産を持つ僧侶が存在したことが示唆されている。『禪林備用清規』においても、遺産としての不動産については叢林に所有権が移るという記述があるとともに、遺品として「書籍・佛像・經卷・観具」があつたらしいことが伺える。また『幻住庵清規』では、死亡した僧侶の遺品・価格目録の書式において、「袈裟・直綴・鉢盂・襖・鞋・袴・轍」といった日用的な物品が遺品として挙げられている。

その他、『禪苑清規』や『勅規』の記述によれば、唱衣による収入から葬送の経費を引いた金額については、三等分して叢

林や僧侶に分配される。この「抽分錢」については、『入衆須知』・『叢林校定清規總要』には明確には記されないが、『禪林備用清規』では収入額の多寡による抽分の有無が記される。『幻住庵清規』も「諸方の古例」として「抽分錢」を記すが、『幻住庵清規』が菴居を基礎とする「一家之規」という性格を持つためか、実行しないという記述があった。

三諦説におけるデイヴィッドソン哲学の位置づけ

渡辺 隆明

天台実相論は、現代の危機的な思想状況を開拓する仏教思想の一つと考えられる。西洋思想と天台実相論とを比較検討するためには、天台実相論の中で西洋の哲学を位置づける必要がある。そのための作業の一環として、分析哲学者の一人であるドナルド・デイヴィッドソンの哲学を天台実相論の中に位置づけることを試みた。発表では、黒崎宏による仏教思想と西洋哲学との比較を手掛かりとして、天台教学とデイヴィッドソンの哲学を比較検討した。デイヴィッドソンの哲学が天台教学において一心三觀のうちの仮觀に位置せられることを示そうとしたのである。

天台大師智顗は法華經を根本經典とし、天台実相論を展開した。諸法実相を得るために、智顗は円頓止觀を提示する。『摩訶止觀』で明らかにされる円頓止觀においては、空・假・中の三諦の圓融すなわち、即空・即假・即中が目指される。こうした天台教學もまた、緣起的世界觀を通じて意味的世界觀を展開している。このことは、新田雅章の論文「中国天台における

る因果の思想」（仏教思想研究会編『仏教思想三 因果』平楽寺書店、一九七八、所収）によつてあとづけられる。

黒崎宏は、ウイトゲンシュタインの視点を通じて、龍樹の縁起思想に基づく仏教思想を反実在論として示し、世界のあらゆる物事は言語的存在だと述べた（黒崎宏『理性の限界内の『般若心経』——ウイトゲンシュタインの視点から』春秋社、一〇七、等）。

われわれが住んでいる世界は、物の世界でも事の世界でもなく、「言語ゲームの世界」であり「意味の世界」である。われわれが普通持つような実在論的世界観を拒否したのだ。そして、縁起の世界は意味的な関係をもつものだとし、「縁起の世界＝意味のネットワークの世界＝言語ゲームの世界」と黒崎は論じたのである。だが、端的に言つて、言語という意味論によって存在論が尽くされるということには疑問が残るし、もし言語によって存在論が尽くされるのだとするなら、あらゆる存在物はわれわれ人間の所産という事になりはしないだろうか。すると結局、黒崎が作り上げた世界観（言語ゲーム一元論）は、現実のものごとは、われわれが作り出したものに過ぎず本当のことではない、という空觀に強く偏つて、ニヒリズムに陥つてしまふのだ。

この弱点を、デイヴィッドソンは回避することができる。ところでも、彼が、言語的な世界観を重く受け止めながらも、単純な言語的な一元論に立たないからである。彼の議論の特色は、論文「概念枠とどう考えそのものについて」（デイヴィッドソン、野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要訳『真理と解釈』勁草

書房、一九九一、所収）において論じられる、概念枠批判の議論にみることができる。彼は概念枠と内容という二元論を批判し、われわれの世界観が言語の影響を強く受けていることを肯定する。しかし、デイヴィッドソンの世界観は、単純な言語的な一元論ではない。われわれが言語的な生活を営みつつも言語に飲み込まれることなく、われわれの信念や文は現実の出来事によつて真偽が判定された部分を残しているのである。われわれは言語的な世界にあることを自覚しつつも常に現実を参照する余地を残しているのだ。

このようなデイヴィッドソンの見解を見ていくと次のことが明らかになる。われわれは世界を言語的に理解しているのだが、と空觀の如く実在主義を拒否しながらも、われわれの言語的な世界観を肯定しつつ現実の世界が関わる余地を残していく。こうした理解の仕方は、三諦説において、仮諦を観する仮觀に相当するといえるだろう。

法華經の成立過程についての一試論

西 康友

梵文法華經（以下、「SP」）¹⁾ SP の底本は、H. Kern and B. Nanjio (ed.): *Saddharma-puṇḍarīka, Bibliotheca Bud-dhica X*, St.-Pétersbourg, 1908-12 を用ひた。じつは、この用語（*saddharma-puṇḍarīka* 「（梵文法華經の經典の名称）」、*dharma-paryāya* 「教説」「法體」、*sūnya* 「空」、*sūnyatā* 「空性」「*般若*のもの」、*anutpatti-kadharma-kṣanti* 「（何を）生じぬ」とがなこと、「真理を證める（智慧）」）に着